

Column

“ピープル・ファースト”
という視点と実践一般社団法人 光楓座
一般社団法人 e f c o . j p

代表理事

佐藤建吉

▼ピープル・ファーストとは
“ピープル・ファースト”という言葉がある。団体名や会社名、さらには中国や韓国の政党名の英訳になっているように、いささか不合理ではあるが、筆者の好きな言葉であり、これに新しい解釈を加えて、「エネルギーの源」のコラムに込めたい。

英語の people は、人々、人民、国民などであり、一般の人の集合を意味する。general や common を付けると、一般人の意味が明確になる。そういう人が「第一」であるとするのが、私の考える「ピープル・ファースト」である。「安全第一」のゼイティ・ファーストに倣ったスローガンでもある。

▼ピープル・ファーストの視点

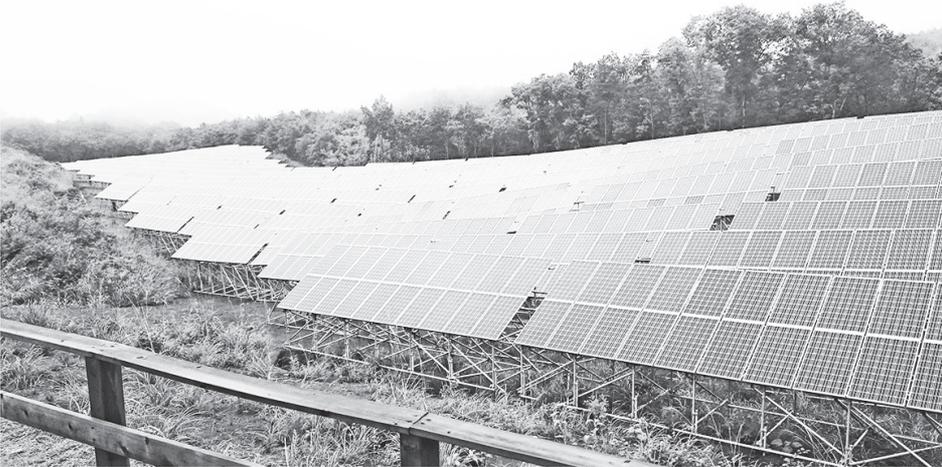
それでは、エネルギーにおける「ピープル・ファースト」とは何であろうか？三つの側面から考える。①摂取（消費）、②変換（生産）、③選択（供給）、の三つである。それぞれについて述べる。

①摂取（消費）

エネルギーは、私たちの日々の暮らし、すなわち生活のために利用されている。一般人の一人ひとりにおいては、エネルギー資源の食料を体内に摂取し、消化や化学変化

をして、栄養や熱にし、摂取と消費は人間の生存で、それをエネルギーと捉取と消費は人間の生存して生きている。すなわち、第一番目に挙げる“ピープル・ファースト”であり、生きるために、エネルギーを摂取し、消費する。同時に、人間の存在している。ほかに、光や熱が地球における他の動物や生物・植物などのほかなどのエネルギーを体の表面から取り入れ、同じ地球の存在についても配く生きるエネルギーとして慮しなければならぬ。これは、エネルギーが、“ピープル・ファースト”として、その使命り、見方によっては、エネルギー消費ともいえる。という。

②変換（生産）



私たちの暮らしは有史以来、省力としての快適や

来、省力としての快適や便利さを、希求してきたように思える。それは、科学や技術として、暮らしに彩りを添え、発展してきた歴史といえる。省力化には、①で得たエネルギーを、人間以外に振り向け、仕事や機能をしてもらうことで達成してきた。自動車や洗濯機などは、分かり易い省力化の例である。そのため

③選択（供給）

義がある。 “ピープル・ファースト”の第3番目として、エネルギーの「特にエネルギー源の「選択」に目を向けたい。それはもちろん、①②にも関係している。

エネルギーの摂取や消費が個人の“ピープル”に行われ、それが市場をつくってきた。その選択の局面においては、安価や利便性などに価値がかけられ、それが市場をつくってきた。また、エネルギーの生産は、近代的組織形態の大企業などで為されてきたとしても、もはやエネルギーの持続性や枯渇、さらには安全性などに、無関心な“ピープル”としての存在は、許されない。以上のような背景として、またこれまでの責任としても、エネルギーとその源の選択には、“ピープル”は大きな役割と重要性があるので、“ピープル・ファースト”の第3番目として掲げている。実は、“選択”ばかりでなく、新たに、“供給”という側面が、経済の原則としても無視できない。それは、生産と供給、そして消費という関わりをなかでも捉えなければならぬ視点である。

▼ピープル・ファーストの実例

エネルギーに関する「ピープル・ファースト」は、前述のように、いわゆる現行の生産・供給（流通）・消費という社会経済の中で、“ピープル”としての個人個人の役割や関与の大きいことを、“安全第一”の標語を借用して考えた。しかし、

「安全第一」は、「品質第二」、「生産第三」の経営方針として提唱されてきたもので、第一、第三についても、忘れてはならない。これについては、いまのところ言及するほど考察が進んでいないが、環境や持続可能は無視できないだろう。ここでは、①②③の「ピープル・ファースト」を「全国で当地エネルギー協会」のメンバーの活動にすることが出来る。それは、自分たちの暮らしを自分たちで確保し、守ることに他ならない。個人ではできないので、それを地域として実施しているのが「当地エネルギー」の団体と、その活動である（写真参照）。「地域の、地域による、地域のためのエネルギー」といえる。その活動は着実に拡大しており、地域を超えて国レベルにまで広がっている。これは本コラム④（第60号、2016年9月5日発行）に述べた「市民がつくるエネルギーシフト」の実践でもある。



農家が事業とした新機軸の水田でのソーラーシェアリング(喜多方市、50kW)